

明治期後半、大正、昭和初期の庶民階層に おける家庭の教育に関する一考察⁽¹⁾

—年長者からの聞き書き調査による「一家団欒」の考証—

佐野 茂

I 報告課題

本報告課題は明治期後半、大正、昭和初期における庶民の家庭生活全般を通じて、意図的、無意図的教育がどのような形態で営まれていたのかを、年長者からの面接調査、聞き書き調査により考証をこころみたものである。とりわけ囲炉裏を中心とした「家族の団欒（だんらん）」という無意図的な家族交流の中で生み出された家庭の教育力に焦点をあてたい。

この団欒を中心とした家族交流の考証の研究動機の一つは、現代に比べ貧困かつ家父長制の中にあった当時の庶民家族が、「団欒」という親和的な家族交流を営んでいたのかという単純な疑問である。つまり、明治期から戦前にかけては旧民法下、庶民家庭においてもより家父長制が浸透、徹底された時代であるが、そのような時代において親和的雰囲気を基調とする家族の団欒が、家父長制の下、しかも経済的困窮の中にあった庶民家庭において、営まれていたのかということである。

この疑問に対する考え方として例えば家永三郎（1959）の『日本文化史』の江戸時代の「封建秩序の固定」について書かれている一節の中に当時の家父長制度から家族間の基本的関係を少しく触れられている箇所がある。それは、「財産と称するに足りる程のものが全くなく、夫婦の協同労働によって生活するほかない下層の商人や百姓の場合は少しく違っていたけれど、武士ならば俸禄、商人なら店舗、農民なら土地という、家父長の占有する固定財産によって生活を支えている人たちの家庭ではその財産権の唯一の相続者である家父長の他家族に対する権威、というよりその財産を世襲する「家」の権威が絶対的であり家族はそれに隷従することを強制されていたのである。」といった論述であるが、この点からするとむしろ庶民家庭はどこまでもその

制度の傘からはみ出しており、時代を越えて、家族間の権威とか隷属といった非人間的とも思える関係とは無縁の存在としてあり、当然そこでは親和的な雰囲気のもとに団欒も営まれていたと考えられるのである。

また明治期にはいと都市部の比較的裕福で、近代的市民意識を受容しつつある一部の家庭においては「団欒」という家族的交流が当時の史的記録、小説そして若干の調査報告等から⁽²⁾、今日と比較して、頻度、程度の差はあれより日常的なものとして営まれつつあったとも考えられている。

したがってこの疑問に対する仮説として明治期以降における団欒という楽しい家族間の精神的、物理的交わりは、ゆるやかにその程度、頻度を高めていったと考えるのが妥当かもしれない⁽³⁾。しかし、いずれにせよ圧倒的大多數の、地方の第一次産業に従事する経済的に裕福ではない庶民家庭において団欒という家族の交わりがどの程度なされていたかについては不明瞭な点も多く、断片的な記述はみられるが、量的にまとまった報告はほとんどなされていない。

このような疑問、理由から小論は当時の庶民家庭の「団欒」を中心とした無意図的な部分での教育作用を考証するとともに、くわえて「しつけ」を中心とした意図的な教育についても考察をこころみたい。なお「一家団欒」の定義およびそれのもつ教育的意義については佐野（1988）の調査をもとに「家族が楽しく親和的に集う状況」と概念規定するが、その象徴的情景としては、家族が集って楽しく食事をすることや、家族連れでの旅行等、遊興のために外出するといった営みである。

II 主たる方法

一対一の面接法で、当時漁労を主たる生活の糧とする（二次労働として農業を営むケースも含む）庶民家庭に育った大正、明治生まれの年長者77名（男性58名 女性19名）について以下の質問内容で、物心つき始めたころから、小学校卒業時ぐらいまでのことについて記憶にあることだけを回想してもらった。また対象地域（表1参照）を離島に限定した理由は調査の精緻性を鑑みたもので本来であれば「島」ということに限定せずに対象地域を広げるべきだが今回の報告は離島という枠組みの中で調査を実施した。漁労民に限定した理由も「庶民」という枠組みからすれば、農業、雇用労働者をも含まなければならぬのだが、それぞれの階層の生活スタイル、意識の差異を

考慮する必要性から、まずは漁労を生業の中心とした庶民階層に焦点をあてることにした。

なお「庶民」の規定方法としては、情報提供者から家庭生活の状況を聞く中で、例えば一年の内のどの程度米飯を食していたのかといった食生活や、親の労働形態、あるいは直接、経済的状況を質問することにより判断した。面談者の依頼、選定方法については主として漁労を中心とした地域の老人会や福祉協議会などに、その土地に幼少時から住まいしており、記憶の鮮明な年長者の紹介を依頼した。

調査年月日は1990年3月1日より1992年3月31日まで。

表1 調査地域一覧

対馬	厳原町(15)	三津島町(9)	豊玉町(6)	上対馬町(10)	峰町(4)
壱岐	郷の浦町(6)	勝本町(3)	芦辺町(3)		
響灘	福岡県 藍島(3)				
	山口県 蓋井島(9)	角島(4)	相島(2)		
周防灘	周防大島(浮島3)				* () 内数字は面談者人数

表2 対象者の属性(年齢及び家族形態)

明治39年以前(85才以上)	9名 12%	三世代(四世代も含む)	60名 78%
明治40年～44年(80～84才)	12名 16%	二世代	5名 6%
大正1年～7年(73～79才)	32名 41%	その他	12名 16%
大正8年～14年(66～72才)	24名 31%	※面談者の幼少時の家族構成	

表3 質問内容

(1)	一日のライフスタイル(生活慣習、様式等)
(2)	団欒の有無 1)夕食時の状況、雰囲気 2)夕食後の雰囲気 3)家族揃っての遠出 4)家族の思い出 5)正月、盆、通過儀礼等
(3)	しつけの内容、場
(4)	その他 父親像、母親像、地域教育等

II 結果

上記の質問内容を中心とした聞き書きの内容を統計的数値としてまとめあげたものが以下の結果である。

1 一日のライフスタイル等

表4 起床・就寝時間

現在の子供と比較して			
もっと早くから起床していた	46.8%	もっと早くから寝ていた	57.1%
だいたい同じくらい	29.9%	だいたい同じくらい	10.4%
当時の方がゆっくりしていた	1.3%	遅くまで起きていた	7.8%
よく覚えていない	22.1%	よく覚えていない	24.7%

2 団欒の有無

表5-1 夕食時の状況(1)

家族全員が集っていたか？	
たいてい集った	94.8%
たいてい集わなかった	0.0%
集ったり、集わなかったり	2.6%
よく覚えていない	2.6%

表5-2 夕食時の状況(2)

誰を中心にまかなわれていたか？（三世代家族のみ対象）			
物理的には		精神的には（一人だけ回答）	
父	3.4%	父	53.3%
母	60.0%	母	1.6%
両親	11.6%	祖父または、祖母	3.3%
祖父または、祖母	5.0%	その他	5.0%
よく覚えていない	20.0%	よく覚えていない	36.8%

表5-3 夕食時の状況(3)

夕食時の座席の位置	
厳しく決まっていた	16.9%
自然と決まっていたがあまり厳格なものではなかった	53.2%
特段決まっていなかった	24.7%
よく覚えていない	5.2%

表5-4 夕食時の状況(4)

夕食中の会話について（食事中の会話は禁止されていたか）	
食事中、できる限り静かに食べるようにいられていた	16.9%
別に、とりたてて厳しくいわれることはなかった	54.5%
覚えていない	28.6%

表5-5 会話について

学校での出来事を親によくはなしていたと思う。
話をして食べると両親に叱られた。
一日の出来事を話したと思う。
先祖を大切にということをよく言われた。盆には墓掃除をなさい。
学校であったことを話したり、自分の一日の反省なんかを親に話していたと思う。
仕事や勉強、家のしきたりの話。
早く食べることが先決であった。
よもやま話をしてくれたと思う。その中で子供のあるべき道をよく言われた。
昔話を祖父母がよくしてくれた。

表5-6 夕食時の雰囲気(1)

(まあまあ) 楽しかった	49.4%
(おおよそ) 別に楽しくなかった	7.8%
とりたてて楽しいともいえないが、楽しくないともいえない	31.2%
楽しい時もあったし、楽しくない時もあった	1.3%
よく覚えていない	10.3%

表5-7 夕食時の雰囲気(2)

はりつめた、厳粛な雰囲気だった	5.2%
とりたてて、厳粛な雰囲気でもなかった	83.1%
どちらともいえない	2.6%
よく覚えていない	9.1%

表5-8 夕食時の雰囲気(3)

どちらかといえば（精神的）に明るい雰囲気	42.9%
どちらかといえば（精神的）暗い雰囲気	2.6%
どちらともいえない（両方あった）	12.9%
とりたてて明るいとはいえないが決して暗くはない	11.7%
よく覚えていない	29.9%

表6-1 夕食後の状況(1)

家族全員が集っていたか?	
たいてい集った	84.6%
たいてい集わなかった	9.6%
集ったり、集わなかったり	5.8%

表6-2 夕食後の状況(2)(主になしていたこと)

父が昔の話をよくしてくれた。学校の宿題。
勉強と手伝いごと。
早く寝ていた。
手伝いごと、特にほやみがき。
夏はカヤの中でよくあそんだことを覚えている、祖父母から昔話もよく聞いた。
両親はイカの調理や草履を編んでいた。カンテラをつけて勉強することもあった。
両親は夜業、囲炉裏を囲んでなにかしていた。
夏はカヤの中できろくろしていた。冬は早く寝ていた。
勉強などをしたり父親がいろいろ話をしてくれた。母は夜業。
父親は草履作り。
手伝いの記憶はなく雑談などをしていたと思う。
両親はイカの加工。
子供は寝る事がランプの節約になるため、早く寝るようによく言われていた。
勉強をしていた記憶はほとんどない。
囲炉裏のそばのかがり火やランプ灯の下に兄弟が集まり勉強したのを覚えている。
勉強はしなかった。但し手伝いごとはよくした。
夕食の後は遊ぶというよりも、とにかく手伝いごと、勉強なんかは二の次。貧乏だったが、魚が獲れた、獲れないといろいろな話を父親がして、楽しい雰囲気だった。
飯を食べたらすぐに休んでいたことが多かったと思う。
飯を食ったら風呂に入って寝た。両親は夜業。時々、カラ臼ふみをよく手伝った。
父母のまわりをきろくろしていたと思う。
囲炉裏の周囲をきろくろしていた。楽しかった。夏は外に出て、みんなで賑やかにしていた。じいさんが足なか(草履の一種)をよく作ってくれていた。
母は夜業、自分は早く寝ていた。
飯を食った後は寝るのが基本であつた。勉強もあまりしなかった。
早く寝ていた。

友達の家に行くこともあったが、たいていはすぐに休んだ。
兄弟で遊んでいたと思うがそんなに遅くまで起きていなかった。
夕食後はカンテラのまわりに集まり、子守をしながら勉強することもあった。
親は夜業、子供は寝るしかなかったように覚えている。
親は夜業、兄弟枕を並べ早く寝ていたと思う。また子守もよくしていた。
むしろ作りをよく手伝った。勉強はあまり言われなかった。兄弟喧嘩もよくした。
よく本を読んだ。
冬は囲炉裏を囲んでごろごろし、夏ははたる取りに行つて、よく近場に遊びに出た。
手伝いをよくしたが、楽しかった記憶がある。冬は囲炉裏を囲んで何かしていた。
両親は夜業、子供は自由にしていた。
囲炉裏で芋を焼いたり結構楽しかった記憶がある。
早く寝ていたように思う。
手伝いごと、夏は夜に海に出てタコ取りをしたこともあった。本もよく読んだ。
年寄りからいろいろな話を聞いた。
父が昔の話をよくしてくれた。
学校の宿題をしていた。
勉強。
とにかく手伝いごと（ランプ掃除、油替え）。
外に遊びに行くことはなかった。
覚えていないが、いろいろな話をした。夜業は手伝わなかったが。
父はゴザ作り、母は粉を挽いていた。
農繁期は手伝いごとをした。勉強をすることもあった。
夏はカヤを張り、冬は囲炉裏の火も消して体をすり合わせて寝た。
勉強をしたりカヤの中でいろいろと遊んだり、昔話を聞いたりしていた。
夕食後は暫らくして寝ていたと思う。両親は夜業をしていた。
飯食ったら風呂入って寝ていた。
子守り、夜業を手伝った。
囲炉裏を囲んでいろいろな話しをしていたと思う。両親は夜業。
ロウソクの灯りの下兄弟げんかをしたり宿題をしたりしていた。
両親の手伝いをときどきし、ランプの下に集まりその日にあったことを話した。
宿題もあったがあまり熱心にやっていたいなかった。
夕食後たいてい早く休んだ。両親は夜業。
両親は夜業。
祖母が時々おとぎ話をしてくれたことを覚えている。
冬はこたつの周りに集まりごろごろしていた。
家のしきたりなんかを長男なのでよく言われた。

表6-3 夕食後の雰囲気(1)

(まあまあ) 楽しかった	23.4%
(おおよそ) 別に楽しくなかった	2.6%
とりたてて楽しいともいえないが、楽しくないともいえない	36.4%
楽しい時もあったし、楽しくない時もあった	2.6%
よく覚えていない	35.0%

表6-4 夕食後の雰囲気(2)

はりつめた、厳粛な雰囲気だった	0.0%
とりたてて、厳粛な雰囲気でもなかった	57.1%
どちらともいえない	2.6%
よく覚えていない	40.3%

表6-5 夕食後の雰囲気(3)

どちらかといえば(精神的)に明るい雰囲気	26.0%
どちらかといえば(精神的)暗い雰囲気	1.3%
どちらともいえない(両方あった)	9.0%
とりたてて明るいとはいえないが決して暗くはない	14.3%
よく覚えていない	49.4%

表7-1 家族揃っての遊興のための外出

家族の人に遊興のためにどこか(地域外)に連れていってもらった経験は?	
たびたびあった	1.3%
時々あった	2.6%
一年に一、二回	23.4%
ほとんどなかった	59.7%
よく覚えていない	13.0%

表7-2 どのような場所に連れて行ってもらった？（回答例、任意に抜粋）

弘法大師の祭り。
芝居が村に来た時。（地域内）
島内の芝居見物。
近くの海岸、山に弁当を持って行くぐらい。
学校での運動会ぐらい。
地域外の親戚の家。
道も橋もないのにどこにもいけない。
学校から少し遠くへ行くぐらい。
学校から行くぐらいで家族とは全然行っていない。
一度だけ真宗の話を聞くために祖父に連れていってもらったぐらい。
一度だけ父親に博多に連れていってもらった。
隣部落の祭りには何度か連れていってもらった。
島から出るということはなかった。
部落から出るというのは病気の時。

表8-1 正月、盆に関する状況

家族の人と集まって楽しかったか？	
楽しかった	84.4%
別に楽しくなかった	6.5%
よく覚えていない	9.1%

表8-2 正月、盆に関する状況（回答例、任意に抜粋、但し要約）

とにかく正月が一番楽しかった。
正月、祭り時はご馳走があってみんなにぎやかにやった。
盆、正月は下駄がはけたから嬉しかった。
楽しい思い出は盆と正月。
明るい雰囲気での食事というのは盆か正月ぐらい。
正月、盆はうまい飯が食べれて楽しかった。
正月とか盆とか、一年に何度かは非常に楽しい家族の集いがあった。
正月、盆は米の飯が食べ、みんなが集いその時は楽しかった。
正月、盆はお膳がたくさん並んでうれしかった。三日間程は白い飯。
お膳は盆、正月の時だけ、普段は囲炉裏のカマチの上においていた。
盆、正月、花の節句だけは天国だった。
家が多忙であるため食事の時でも厳しい雰囲気があった。但し正月、盆は楽しく家族が集まった。

表9 「団欒」に関する回答について（回答例、任意に抜粋、但し要約）⁽⁴⁾

日常的にも楽しいなごやかな雰囲気はあった。
昔は昔でテレビはなかったがそれなりに楽しい雰囲気もあった。正月が一番だが。
夕食後は団欒（回答者自身の方から「団欒」という表現が出た）の雰囲気を感じた。
家族揃って一家団欒（回答者自身の方から「団欒」という表現が出た）というのは正月、盆、祭り時ぐらいだった。
貧しかったがいわゆる「団欒」というものはあった。
正月、盆に家族が集まった時、団欒というようなものがあったと記憶している。
母親が多忙で寝るまで忙しくしていたので家族は集ってはいたがその雰囲気は決して明かるいものではなかった。
質素な食事ではあったが楽しい雰囲気のもとに夕食がなされていた。
一日あったことを話したり、親が昔のことを話したり良い雰囲気はしばしばあったがいつもいつもあったわけではなかった。
団欒は盆か、正月だけで、親戚もあつまってその雰囲気があったように思える。
貧乏ではあったが魚が獲れた獲れないと結構楽しい雰囲気で家族が集っていた。
夕食時は飯が食べれるので嬉しかったが必ずしも楽しく、和やかな雰囲気ばかりではなかった。
家族揃っての団欒なんか、盆と正月と祭りどきぐらいだった。
回数は少なかったが、楽しく集い飯を食うということはあった。
父親を中心にいわゆる団欒というものはあったと思う。
当時、楽しく集う家族というのは考えられなかった。
当時、普段において、今日いわれるような団欒は考えられない。
昔も家族集って楽しくやっていた。
団欒と呼ばれるものは正月ぐらいだろう。
父親が中心となり囲炉裏を囲んで楽しい雰囲気はあった。
囲炉裏を囲んでご飯を食べる時は今でいう団欒みたいなものがあった。
飯台を囲んで今日あったことや明日の用意などいろいろ話をして、結構楽しかったことを覚えている。
自分の生い立ちからそんな団欒というものはなかった。
今でいう団欒というようなものは全く経験していない。正月、盆もさほど楽しく集ったという印象はない。とにかくいろいろ家事手伝い、家業が厳しかった。

3 「しつけ」について⁽⁵⁾

表10-1 しつけの主体者

主に誰からしつけをうけましたか（両親揃った三世代家族のみ対象）	
祖父母	12.2%
母	22.9%
父	12.2%
両親	29.8%
両親、祖父母の全員から	5.3%
よく覚えていない	17.6%

表10-2 しつけの場、時(1)（回答例、任意に抜粋、但し要約）

特別にしつけをうけた覚えは無い。
 家族というよりも地域からでとにかく家よりも十倍も二十倍も厳しかった。
 学校も厳しく父母はノータッチで先生の言われるとおりに実践していた。
 部落全体から教わった。
 全て学校任せだったと思う。ころがけての家庭のしつけというものには記憶にない。
 挨拶を中心に老人に対する畏敬の念。但し家族の人からというよりも、学校、地域の人から言われたと思う。
 平生からとりたててしつけられるという感はなかった。
 家庭でというよりも青年会なんかによくしぼられた。
 学校、若衆連中でいろいろと厳しく注意ごととかを言われたが、家で何かとりたててという記憶はない。
 特段家庭においてしつけというものはなかったと思う。
 青年会では挨拶、年寄を敬うことを言われた。
 おそらく地域全体からいつのまにか社会のルールを学んでいた気がする。
 家庭からいろいろと学んだという意識はないのだが。
 挨拶ははちまきをとってする。こちらから見様見まねで地域から学んだ。
 家族からそれほどうるさくいわれなかったが、若衆に入ってから厳しかった。
 若者衆でのルールがとにかく厳しかったので家庭でのしつけは忘れた。
 年寄りを大切にしろといわれたぐらいで、あとは自分から学んだと思う。
 しつけは学校でされたこと記憶している。
 部落のしつけは厳しかった。部落のしつけを身につければ一人前であった。

表10-3 しつけの内容(回答例、任意に抜粋、但し要約)

食事中の行儀と言葉づかいについてはよく注意を受けたが、厳しく言われたという記憶は薄い。
地域のきまりについて言われた。但し勉強なんかは全然言われなかった。
挨拶、手伝いごとに関連したこと。
具体的なことは覚えていないがとにかく厳しかった。
苦労しても他人を助けなさい。
お金の使い方(大切に使うこと)。酒は飲んではならないといわれたが、それ程やかましくいろいろと言われなかったと思う。
年寄りを大切にすること。
神仏を大切にいなさいと言われたが、それ以外はさほどうるさくなかった。
母親から食事中の作法についていろいろ教わった。
手伝いごとに関していろいろといわれた。
神さまを尊ぶということ。
父親が帰るまでは食事をしてはだめだといわれていたこと。
特に、何もないが本当によく働く母親のすがたをみて横道にそれなかった。
年長者への尊敬の念をもつように言われた。
喧嘩をしてはならない。よその子に暴力をふるうな。
家庭教育というよりも学校での影響が強かったように覚えている。
人の好まないことを進んでやれと言われた。
手伝いごとに関連して厳しく言われた。
まず、他人への挨拶、神仏を大切にすること。
共同作業のなかでいろいろと自ら学んだと思う。
祖先を大事にしろということ、
手伝いごとのなかからいろいろとよく注意された。
人に迷惑をかけた場合よくげんこつをもらった。
飯の食べ方(音をたてるな)。
人のものを取るなということ。
何事も辛抱の気持ちをもつことを教えられた。怠け者になってはならない。
飯の食べ方。とくにご飯をこぼすと目がつぶれるとよく祖母から言われた。
人の悪口を言わないこと。時間厳守。
兄弟げんかをするなどはいわれたが、勉強については何も言われなかった。
世間から学んだとおもう。
親の言うことをまずきくということをしつけられたと思う。
他人に迷惑をかけるな。
親から言われたことは守る。お金の拾い食いは腹が痛くなると言われた。
言いつけられたこと(手伝いごと)は必らず守るということ。
座っているとき膝をくずすとよく叱られた。年寄りを大切にしろともよく言われた。言葉使い。そして先生は絶対であるということ教えられた。
土族のながれをひく祖父がいろいろ非常に厳しかった。
じいさまから木の棒でよくたたかれ厳しくしつけられた。

表10-4 家庭でのしつけの場、(回答例、任意に抜粋、但し要約)

来客時の前後。
特定の場、時間は関係無い。
あえてどこどこということとはなかった。
自然といつのまにか教わった思う。
手伝いごとをしている時。
生活全般で。
毎日の生活の中から。
日常生活全般から、もちろん食卓を中心に。
手伝いごとをしているいろいろとしつけられたと思う。
仕事を通じて学ぶ。
自然といつのまにか。
手伝いごとを通してしつけられた。

4 その他

表11 家族との思い出(回答例、任意に抜粋、但し要約)

両親が仕事のため家をあけていることが多かったので、運動会の時、家には祖母しかおらず、だれも来ずに悲しかった思い出がある。
母親が自分の体を心配してくれて、勉強するな、勉強するなとよく言ったこと。
田植えの頃父親より早く家に帰り、先に足を洗っていたら叱られた。ただ、その後父親に足を洗ってもらって非常に嬉しかった記憶がある。
両親からコンペイ糖のお土産を買ってきてもらったことを今でも嬉しい記憶として覚えている。
父母がごはんを平等に分け与えてくれたこと。自分一人だけが食べ叱られた。
母親がこづかいを父親に内緒でくれたことを覚えている。
父親はやっぱりおそろしかった印象が今でもある。
両親の離婚は子供心にショックだった。
祖母が学校から帰ってくると囲炉裏に火をくべ待っていてくれたのを覚えている。
父親に叱られてそれをよく母親にかばってもらったこと。
仕事を通してのやりとりの中では父親は非常に厳しかった。
父親が朝早く起きて草履を編んでくれたことが今でも嬉しく覚えている。
夜も昼も子供達の草履を作っていてくれたことを覚えている。
雨降りが好きだった。それは雨が降れば両親が外に出ずに家で仕事をしたのでみんなとわいわい楽しくやれたことが忘れられない。
先生に叱られたことを家のものからきつく叱られた。
子守をさぼって遊び、母親からよく叱られた思い出がある。
祖父がわたしが学校から帰ってきた時合図として口笛を鳴らしてくれたことを嬉しい記憶として覚えている。

表12 通過儀礼の経験

経験有り	64.9%
経験無し	18.2%
よく覚えていない	16.9%
その時どのように思いましたか？	
嬉しかった	39.0%
別に何とも感じなかった	0.0%
よく覚えていない	61.0%

表13 地域の教育（青年会、若者組等）、（回答例、任意に抜粋、但し要約）

若衆連中があって厳しかった。何か問題をおこすとみんなで注意した。
 上下関係の厳しい若者宿があった。
 青年会は結構楽しかった。
 十七才の時入会し、三十五才まで、上下関係が厳しく親父よりも恐い存在。
 盆の行事などをしきる。上下関係は非常に厳しかった。
 学校を卒業すると入会し、厳しいところだった。
 学校を卒業して二十五才までが青年団、それから三十五才までが青年会で悪いことをしてはよく叱られた。
 若者衆での約束事はとにかく厳しく、挨拶、年長者への尊敬の念等いろいろとルールがあった。
 青年団に入らないと村八分だった。
 そんなに厳しくなかったが二十五才まで青年会に入らなければならない。

表14 手伝いごとについて（回答例、任意に抜粋、但し要約）

勉強はしなかったが手伝いごとはした。
 ごえもん風呂に水を入れたり、とにかく手伝いごとをよくした。
 農繁期はよく手伝った。
 小学校は五年生でやめたが、家業を手伝っていたので横道にもそれなかった。
 子供をおんぶしながらよく勉強をした。
 夜業をよく手伝った。
 とにかくランプのほや磨きをやらされた。
 水汲みの仕事を忘れていて、家に遅く帰り、親にきつく叱られた。
 学校から帰るとまず水汲み。
 長男であったので学校から帰ると草履づくり。
 朝の水汲みがあったから早くから起きていた。

表15-1 父親にあまえることができましたか？⁽⁶⁾

どちらかといえばできた	21.9%
どちらかといえばできなかった	42.5%
どちらともいえない	6.8%
よく覚えていない	28.8%

表15-2 父親を尊敬していましたか？⁽⁷⁾

尊敬していた	68.5%
とりたてて尊敬という意識はなかった	19.2%
よく覚えていない	12.3%

表15-3 母親にあまえることができましたか？

どちらかといえばできた	68.1%
どちらかといえばできなかった	6.9%
どちらともいえない	5.6%
よく覚えていない	19.4%

表15-4 母親を尊敬していましたか？

尊敬していた	31.9%
とりたてて尊敬という意識はなかった	57.0%
よく覚えていない	11.1%

IV 考察

1 団欒を中心とした無意図的な教育

漁労民、離島という限定性を有する調査ではあるが、当時の日常生活において団欒と呼ぶに足りうる家族的交流は正月、盆、祭礼時等の一年の節目、節目においては今日と同等程度に営まれていたようだが、日常的には頻度、密度とも今日と比較すれば程度の低いものであったように考えられる。

したがって無意図教育との関係でいえば、団欒からの家族の愛情を感得する程度は今日と比べると少なかったかもしれないが、一方で親が遅くまで夜業をする姿や、ほとんどの親、祖父母が子供の草履を日常的に編んでいたと

というような親の無意図的な行為が、家族の愛情表現として、自然のうちに子供に受容されていたのではないだろうか。

2 「しつけ」を中心とした意図的な教育

「しつけ」を中心とした家庭における意図的な教育については、その程度において強く、熱心になされていたというより、幼少時は何よりもまず学校が主であり、家庭は学校教育を補完、支援する場として機能していたとの印象を強く受けた。また学校卒業後の教育の中心は地域の教育組織にほぼ全面的に委ねられていたようである。ただ内容面における特徴として、家業、家事を手伝う過程において、親からいろいろと注意されたり、褒められたりする場面は多かったことから、今日のような口頭だけの価値的内容の教育（しつけ）ではなく、目にみえる日常的活動を通じ生活に密着した内容のしつけがなされていたと想定できる。

3 方法論上の問題

今回の調査においての方法論上の問題であるが、まず最大の問題は記憶に関する問題で、幼少時の記憶がどこまで正確に回想できるかという問題である。心理学の記憶の問題に関連してくるが相良（1950）によれば一般論として「快」の感情はより強められ、「不快」の感情はより柔らげられるということから、このあたりの記憶のバイアス（偏向、誤差）をどう対処するかという課題がのこる。つまり、当時の家族関係、あるいは家庭の雰囲気は現状よりもより良好な状態で報告されているかもしれないということで、この点を考慮して調査結果を概観する必要がある。もう一点は、質問内容が極めて家族間の私的領域に関する事柄であるため情報提供者がどの程度まで心の内を明きらかにしたかということである。質問内容によっては意識的に虚偽の情報が報告されたり、また隠蔽される可能性も考えられるため、本調査では不明瞭な回答、またはどうも話をしたくないと思われる項目については、追求質問、助成想起はできるだけ避け、あえて回答を求めないということで対処した。

〔付記〕本研究は平成三年度文部省科学研究補助金（奨励研究A）『明治後半、大正、昭和初期の庶民家庭における「一家団欒」の考証と教育的意義の

一考察』研究課題番号(03710125)を得て行われたものである。

注

- (1) 本報告は第44回日本教育社会学会(岡山大学、92年10月10日)において口頭発表したものを基本に要約したものである。
- (2) 例えば当時のチェンバレン、モース、イザベラバード、ハーン等の外国人による見聞録、あるいは島崎藤村の『家』、中勘助『銀の匙』等自伝的小説と評されるもの、そして藤本浩之輔著『明治の子ども遊びと暮らし(本邦書籍)』等、団欒についての断片的記述は数多く探すことはできる。
- (3) この仮説の考え方は団欒が生成される条件を基にしたものだが、その条件とは一つは家族間の民主的、親和的雰囲気あげられ、もう一つは家族が集う場、時間の有無でありそして三つめの軸として楽しい雰囲気を醸し出すための装置が必要であると考えられる。当然、最後の軸は経済的環境との相関が強いわけで、時代の進展とともに経済的環境が改善されていったということは述べるまでもないことである。したがって明治以前、そして明治、大正と昭和初期という時代の枠で考えた場合、それぞれの条件は少しずつ良くなっていたと考えるのが妥当であることからこの仮説を導きだした。
- (4) ここではこちらが規定する「団欒」の概念を説明した後に、そのような家族交流についての経験を語ってもらった。
- (5) 質問時における「しつけ」の概念の説明、表現としては『家庭内での規範、約束事、守るべきことなど、事だてて特別に家族からうるさく言われたこと、注意をうけたこと、いわゆる「しつけ」というのでしょうか……』という表現で説明した。
- (6) ここでの「あまえる」という言葉の説明として、精神的、物質的にたよる、心をまかせる、また時には物質面でもたよるという意味として説明した。表15-3も同じ。
- (7) ここでの質問は父親の日頃の行為、行状とは無関係に、父親であるということだけで無条件に尊敬していましたかという意味で質問した。表15-4も同じ。

引用文献

- 家永三郎 1959, 『日本文化史』, 175頁, 岩波新書。
相良守次 1950, 『記憶とは何か』, 122-125頁, 岩波新書。
佐野 茂 1990, 「一家団欒の概念および教育的意義に関する一考察」『関西学院大学文学部教育学科研究年報』16集, 19-32頁。

以上